玄洋

館　報
発　行　社団法人 玄洋社記念館
郵便番号　810-0073
福岡市中央区舞鶴二丁目4番24号
電　話　(092)771-3203
ＦＡＸ (092)771-1326

廣田弘毅先生揮毫の石碑

福岡県小郡市の日吉神社

移設・保存が実現

市社協会長　隈太輔氏が奔走

地域の人々が力合わせる

福岡県小郡市の民間の墓地の跡地整理に伴って、墓地に建立されていた廣田弘毅先生揮毫の石碑も処分が検討されたが、建立者の子息の友人で同市の社会福祉協議会長を務める隈太輔氏（80）＝同市寺福童＝の奔走で、同市内の「日吉神社」境内への移設・保存が実現した。隈氏は保存運動を展開し、地域の人々に石碑保存の意義を説くなどして廣田先生のご遺徳の普及にも多大な貢献をされた。

青い自然石でできた石碑　家　廣田弘毅書」、裏に「昭和十三年七月建立　内野鶴吉」と刻まれている。「蓮華蔵」は理想界、極楽浄土のこと。

立派に移設された石碑

建立者の内野鶴吉氏は明治十年、同市（当時は村）下町に生まれ、銀行役員や村会議員を務めた地元の知名士。昭和十三年四月、還暦を祝い地元の祇園神社に鳥居を奉納。次いで廣田先生に揮毫を依頼し、内野家墓地に石碑を建立した。廣田先生への揮毫依頼の経緯は詳細にはわからない。

その後、墓地は移転し跡地を内野家の親類が整理することになり平成十四年、残っていた石碑の取り扱いを郷土史家に相談。保存が望ましいとの助言を得た。このため建立者、鶴吉氏の二男、内野長久氏＝同県大野城市＝が隈氏に相談した。二人は、隈氏が長久氏の子息三人のうち二人の仲人をしたほどの親しい間柄。話を聞いた隈氏は「石碑は市にとっても貴重な文化財」と保存に向けて取り組みを始めた。隈氏は市議会議長や市民らと「石碑移築保存を進める会」を発足させ移設先を探した。

市の施設も候補に上ったが、石碑が個人による建立のため実現しなかった。

苦慮しているところに、墓地跡に近い同市下町区の日吉神社の多田隆宮司と宮総代、区長らの配慮で境内への移設が決まった。移設費用も多数の有志の拠出で必要額が集まった。

日吉神社正面

この間、隈氏は地域の人々と福岡市中央区天神の廣田先生生誕地や廣田先生の揮毫がある水鏡天満宮、廣田先生の父、徳平氏が建設にかかわり、台座に氏名が刻まれている同市博多区東公園の亀山上皇銅像などゆかりの地の探訪会を行うなどして、地元ではあまり知られていなかった廣田先生の知名度を高めた。

平成十五年九月六日、日吉神社境内、本殿裏の「虚空蔵さん」横に移設された石碑の除幕式が行われた。

元の姿そのままに建てられた石碑の右前に「碑移築の経過」と移設に協力した人々の氏名、会社名を記した真新しい銘板が設置されている。銘板は隈氏の実行力と地域の人々の先人を敬う豊かな心を後世に伝えることになろう。

移設運動を進めるに当たり、廣田先生を理解するために隈氏は城山三郎の「落日燃ゆ」を読んだ。隈氏は「廣田先生の人物の素晴らしさに引き込まれ、一晩で読了した。感動した」という。その感動が地域の人々にも伝わり、多くの人々の協力が得られたのではないだろうか。

内野長久氏と多田宮司は平成十六年に他界された。

移設の経緯を語る隈太輔氏

玄洋社憲則

第一条　皇室ヲ敬戴ス可シ

第二条　本國ヲ愛重ス可シ

第三条　人民ノ権利ヲ固守ス可シ

今号の主な内容

▽慰霊・顕彰の2行事を斎行＝2面
▽平成18年度賛助会員芳名録＝4・5面
▽玄洋社記念館、日本大学通信教育部と共催で公開シンポジウム＝5面
▽連載「風蕭々」最終回＝6面
▽博多山笠に古島一雄が登場＝7面

初夏恒例

慰霊・顕彰の２行事を斎行

先覚の精神 若人らに継承を

「玄洋社」関連の慰霊・顕彰事業のうち、初夏恒例の「廣田弘毅先生顕彰祭」と「明治十年福岡の変・招魂祭」が五月と六月にそれぞれ斎行された。拝金主義が横溢し、精神の荒廃、人命軽視の現代、玄洋社先覚の精神を、特に若い人々に継承することの大切さを参加者は改めて認識した。

廣田弘毅先生顕彰祭

悲運の宰相・廣田弘毅先生の顕彰祭が五月二十日、福岡市中央区城内五の廣田先生の銅像前で行われた。

社団法人廣田弘毅記念青少年育成会（久保田秀己理事長）の主催。同会会員など約六十人が出席した。

福岡県護国神社による慰霊と顕彰の神事が行われ、また筑前琵琶保存会会主、青山旭子師が「廣田弘毅」を献奏して廣田先生のご遺徳を讃えた。

久保田理事長に代わって吉村剛太郎理事（参議院議員）が主催者挨拶。「廣田先生は戦犯の罪に問われ、一言の言い訳もせず刑場へ行かれた。国を思ってのことに違いない。常に靖亜、アジアを靖んず、ということを唱えられた先生の精神を若い人々に伝えなければならない」と呼びかけた。

同顕彰祭は、玄洋社記念館の創設者、進藤一馬先生が発起して廣田先生の銅像が完成した昭和五十七年から続いている。

厳粛に行われた廣田弘毅先生顕彰祭

明治十年福岡の変 招魂祭

西南戦争に呼応した明治十年の「福岡の変」で散華した福岡藩青年志士を慰霊する招魂祭が、財団法人明道会（理事長、山崎拓・自民党前副総裁）の主催により六月四日、福岡市中央区平和三丁目、平尾霊園の「魂の碑」苑で行われ、約四十人が出席した。

頭山満翁揮毫の力強い「魂」の文字が刻まれた碑の前で警固神社による慰霊・顕彰の神事が行われた。

神事の後、木立の中にゴザを敷いて直会が開かれた。主催者挨拶、講話などがあり、出席者は志を貫いた若い藩士に思いを馳せながら、酒肴を楽しみ和やかなひと時を過ごした。

木立の中の「魂の碑」前で行われた招魂祭

進藤喜平太の思い出・第2部

「追悼録」から

進藤翁の死を悼む

頭山　満

（談話録から）

進藤翁と親しく交わって五十二年になるが、こんな立派な人物は何処を探したって決してあるものじゃない。福岡が生んだ眞の国士とは正にこの人のことであった。温良恭倹の徳と英断果決の膽と両道を兼備した玲瓏玉の如き性格は、誠に求めて得べからざる大人格、眞に富貴に淫せず威武に屈せざる大丈夫であった。

七十六年の生涯に何等奇もなく、衒もない唯當たり前の人物であったが、其當り前なるが故に進藤の生涯は尊いのである。當り前、その當り前が萬人の出来ぬ事ではないか。すべての人間が當り前でないから進藤の當り前が大きいのである。泰山も長江もいつかは動くこともあり、形あるものに動かぬものは絶えてないが、唯徹底した心魂は成敗強弱、衆寡は勿論鬼神も動かすことは出来ぬ。そうあまり大した学問もなかったが、進藤は眞の學者であった。そうあまり、もの数も言わなかったが進藤は眞の雄弁家だった。目は萬巻の書を讀んでも、口は懸河弁を弄しても道徳の心体を知らねば何もならない。進藤が話す事はすべての人が寸毫も疑はなかった。話を聞かぬ前から既に承知しているのだった。筆舌では教えぬが誠と実行に依って立派に百世の師となる人であった。淡々として水の如く常に己を空しゅうして、百年一日の如く忠恕を極めた其生涯は、誠に男子の典型であった。

明治九年一緒に獄に投ぜられた同志十一人の内他は悉く死んでしまった。進藤と二人だけになってい

廣田弘毅　中野正剛　緒方竹虎

先覚揮毫の色紙

当記念館で頒布しています

玄洋社記念館は、玄洋社ゆかりの先覚の揮毫色紙（複製）を頒布しています。そこに書かれた言葉、文字から先覚の熱情と精神が伝わってきます。サイズは縦約27㌢横約24㌢です。

一枚千五百円（消費税含む）。配送の場合は送料実費申し受けます。代金の支払いは、郵便振替用紙を同封しますので郵便局でお払い込みください。

申し込みは郵便（宛先は一面の題字下に記載）かファクス（092・771・1326）でどうぞ。

廣田　弘毅

①【風車　風の吹く迄　昼寝哉】

②【物来順応】

中野　正剛

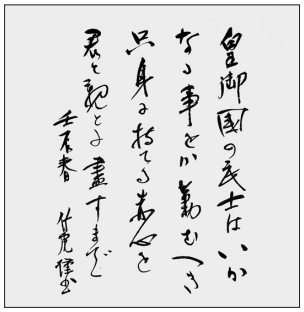
③【為天地立心　為生民興志】

④【欲窮千里目　更上一層楼】

中野　正剛

⑤【丈夫楽々掀天地　豈顧束縛如窮囚】

緒方　竹虎



⑥【皇御国の武士は　いかなる事をか勤むべき　只身に持てる赤心を　君と親とに盡すまで　壬辰春　竹虎謹書】

※壬辰は昭和二十七年＝衆議院福岡一区から当選、吉田内閣の国務大臣に就任の年。

たのにその進藤に先立たれて、いよいよもう俺一人になってしまった。三、四年前迄は阿部武三郎が中風で寝ていたから、あの時の同志は二人半残っていると話して、いつも笑っていたが、その阿部も死に、進藤も死んだ。

俺はいつも進藤の性格を尊敬して、俺もあんな風になりたいと密かに思っていたけれど、俺みたいな怠けものには進藤の小指ほども真似はできない。俺より五つの年長であったが俺よりずっと見かけは若かった。

佛學も神學もやらぬでも、進藤の如き人こそ極楽往生の第一人者、宗旨も糞もそんなものは何でもない。

（抜粋）

◇

進藤守康氏の遺稿、「進藤喜平太の思い出・帰らざる父を憶う」は、前号で終了しました。今号からは「進藤喜平太の思い出」第2部として「進藤喜平太翁追悼録」から、所載の記事を連載します。

昭和三十年五月十一日、末永節翁の発起により喜平太翁の四男、進藤一馬先生（第十代玄洋社社長、玄洋社記念館創設者、元衆議院議員、元福岡市長）を施主に東京・谷中の頭山家ゆかりの寺院、全生庵で進藤喜平太翁の三十年忌の法要が営まれました。

「進藤喜平太翁追悼録」は、法要の席に出席された方々の言葉や寄せられた手記、ご遺族提供の資料などを編集したもので、至誠の生涯とともに、青年の薫陶と国事に奔走された喜平太翁の気概が伝わってきます。

参会者約五十人。この三十年忌法要が、青年の勉強会「励志会」の設立につながりました。

同追悼録は昭和三十年九月十一日、謄写版刷りで発行されました。

編集者は、浅野秀夫氏（現、玄洋社記念館館長）です。

賛助会員芳名録

平成18年度

7月31日受け付け分まで（敬称略）

▼法人・団体の部

【三万円】

吉村剛太郎事務所（福岡市）
㈱中日本開発（名古屋市）
藤沢新政会（藤沢市）
住吉神社（福岡市）
㈱中村緑地建設（同）
㈱ココシス（同）
福岡県護国神社（同）
グローバルアーク㈱（同）
㈱博運社（志免町）
駿和運輸㈱（福岡市）
㈳福岡市薬剤師会（同）
㈱merede athlete（同）
㈱正興電機製作所（同）
東海大学（東京都）
平野神社（福岡市）

誠山会（福岡市）
㈱アキラ水産（同）
㈱稚加栄（同）
㈱思文閣（京都市）
㈱知性アイデアセンター（東京都）
㈶黒田奨学会（福岡市）

㈱那の津寿建築研究所（同）

▼個人の部

【五万円】

久保田秀己（福岡市）
阿部　公明（東京都）

【三万円】

大原　毅（福岡市）
高場　康幸（古賀市）
山嵜　泰生（那珂川町）

【二万円】

妹尾　俊見（福岡市）
縄田　智行（同）
浅野　秀夫（同）
大江田　信（太宰府市）
柴田伊勢雄（福岡市）
山崎　拓（同）
平湯　芳裕（名古屋市）

【一万円】

西川　芳泉（福岡市）
竹林えつ子（新宮町）
石塚　泉（館林市）
山城　直之（福岡市）
早麻　清蔵（同）
長尾　仁（千葉市）
原坂　泰輔（福岡市）
石橋　太郎（同）
柴田　文彦（同）
柴田　文雄（同）
宮崎　菜々（宇部市）
生田　俊明（福岡市）
大島　淳司（同）
加藤　太郎（島田市）
緒方　基一（八代市）
溝口貴美子（福岡市）
石橋　清助（同）
柴田　一俊（同）
大野　裕央（同）
佐野テル子（大牟田市）
原　和重（福岡市）
樋田　幸生（同）
西　政憲（同）
片山　悠（東久留米市）
近藤　正美（福岡市）
渡邊　正志（宇美町）
藤川知佳子（吹田市）
井手　愛明（福岡市）
稲員　勲（同）
秋田　清（同）
波呂喜代子（同）
大地田康夫（同）
由衛省二郎（同）
小野　稔（宮若市）
宮崎　一男（福岡市）
野口　裕子（名古屋市）
飯盛　利弘（志免町）
高井　善三（志摩町）
前田マサ子（福岡市）
久野ミサヲ（北九州市）
石橋　金丸（福岡市）
有馬　学（同）
岡本　成美（東京都）
池上　龍一（八王子市）
坂上　知之（奈良市）
長束　正之（福岡市）
中本　零時（東京都）
武田　正（福岡市）
上田三三生（江別市）
濱地　金剛（東京都）
清水　喜代（福岡市）
菅原　道之（同）
林　登（同）
進藤　邦彦（同）
中島　敏行（同）
箱田　大輔（さいたま市）
青山　旭子（福岡市）
小無　光夫（大阪市）
岩永　二郎（福岡市）
鎌田　正行（東京都）
内田　勝美（福岡市）
田坂　大蔵（同）
戸次　誠一（同）
山内勝二郎（同）
古賀　光謹（同）
内山　森保（同）
守部　義男（同）
矢野庄一郎（横浜市）
武田　凞（さいたま市）
辻　訓（四日市市）
麻生　太郎（飯塚市）
柴田　誠子（東京都）
関　京子（福岡市）
河波　紀彦（国分寺市）
友池　一寛（福岡市）
宮内　大直（同）
高橋　義治（飯塚市）
飯島　健児（東京都）
今林　秀幹（福岡市）
末藤　洋（同）
稲員大三郎（同）
大宮　眞人（青梅市）
真藤　眞栄（東京都）
柿塚　太郎（福岡市）
冨永　計久（同）
杉浦　弥生（中間市）
興膳　克彦（久留米市）
篠原　武（福岡市）
古川　博（同）
吉村　弘美（江迎町）
野口　一人（福岡市）
権田　伴春（同）
木戸　龍一（飯塚市）
原田　政盛（東京都）
神屋　二郎（福岡市）
藤田　道子（太宰府市）
佐藤　善郎（京都市）
魚谷　哲央（福岡市）
安河内洋捷（入間市）
樋口　吉朗（東京都）
室　潔（武蔵野市）
白石　敏彦（福岡市）
速開　正澄（同）
土肥　國夫（横浜市）
小野　勇夫（同）
二村　能史（東京都）
原田　栄進（福岡市）
青柳　紀明（同）
中山　英喜（同）
小柳　政則（同）
久保　康憲（彦根市）
島津　修久（鹿児島市）
三原　朝彦（北九州市）
村上　照枝（伊丹市）
金原　勝（三島市）
坂井　新策（福岡市）
石川　修徳（うるま市）
酒井　智堂（鹿児島市）
脇山　慶仁（福岡市）
坂上　英雄（大阪市）
淵上　貫之（東京都）
戸高　有基（津久見市）
秋根　久典（福岡市）
宮川　一二（東京都）
進藤　勇（福岡市）
西山　陽雄（同）
大藤　実（東京都）
加藤　幸子（古賀市）
緒方　研二（東京都）
上田　一郎（粕屋町）
畠山　尚幸（福岡市）
横田　進太（同）
山部　茂樹（横浜市）
松下　育夫（焼津市）
永野　繁喜（福岡市）
高橋　啓文（同）
中野　正博（田原本町）
喜納　浩一（福岡市）
池野　泰司（同）
香月　隆（同）
中牟田俊春（同）
藤本　顕憲（同）
柴田　治子（八王子市）
二之湯　智（京都市）
白石　安子（福岡市）
小野　敏雄（東京都）
新宮松比古（福岡市）
田中　久也（同）
堺　憲一（同）
堺　弥蔵（同）
進藤　政子（宗像市）
森　久（東京都）
川原　大人（同）
奥村　雅弘（福岡市）
奥村　芳幸（同）
長野　祐介（長岡京市）
大友　道生（佐世保市）
内藤　武宣（東京都）
中村　敦子（東京都）
久恒　政雄（福岡市）
山内　敬一（茅ケ崎市）
山本　幸三（行橋市）
大塚　一夫（福岡市）
高綱　博文（東京都）
青山　明（福岡市）
中村　旭園（同）
豊丹生　信（久山町）
田尾　憲男（横浜市）
谷　十三（福岡市）
小野　繁（宗像市）
河合　浩一（岡山市）
筒井　勝美（福岡市）
村井　正隆（久留米市）
的野　泰庸（福岡市）
森　軍治（同）
箱田　慎二（寒川町）
松下　俊子（東京都）
桑原　廉敬（同）
金子　奉義（我孫子市）
矢野　久世（福岡市）
中山　幸一（同）
永見　忠孝（大和市）
林　満喜雄（福岡市）
福田　明彦（同）
菊川　歓（下田市）
川本　一守（福岡市）
豊沢　健一（遠賀町）
戸川　愛子（福岡市）
内田　壮平（同）
宇都宮教弘（横浜市）

（5面へ）

（4面から）

川原　伸也（福岡市）
権田　伴幸（同）
川辺　俊幸（同）
池内　公子（遠軽町）
堺　彪（福岡市）
高橋　基朗（東京都）
山田　眞（筑紫野市）
池田　徳夫（福岡市）
仲原　志平（前原市）
福田　康男（福岡市）
小林　直貴（横浜市）
津田　隆士（福岡市）
稲石　丈志（同）
牧　昭三（福津市）
岩崎　成敏（福岡市）
河辺　巌（同）
中村　幸夫（福岡市）
廣木　寧（前原市）
天野　俊平（東京都）
小柳陽太郎（福岡市）

お礼の言葉

玄洋社記念館賛助会員の皆様にはご健勝でお過ごしのこととお喜び申し上げます。

皆様には先に平成十八年度の賛助会費の納入をお願い致しましたところ、早速ご協力を賜り誠にありがとうございました。役員一同、心からお礼申し上げます。

さて、玄洋社記念館の近況をかいつまんでご報告申し上げます。

さる八月四・五日、福岡市で開催された福岡青年会議所主催のシンポジウム「見直そう　日本の歴史と精神性」で、本紙に「玄洋社関係史料の紹介」を連載中の福岡地方史研究会会長、石瀧豊美氏が講演、浅野秀夫館長がパネリストで参加致しました。また、別稿で掲載のとおり、十一月には日本大学通信教育部が開催する公開シンポジウムを共催する予定です。来館者も多く、最近は、一際、玄洋社記念館の知名度の高まりを感じます。

今後ともご支援をよろしくお願い申し上げます。

平成十八年九月一日

社団法人玄洋社記念館
理事長　久保田　秀己

「アジアは燃えていたか―アジア主義と福岡玄洋社―」

日本大学通信教育部

公開シンポジウムを開催

11月25日　玄洋社記念館が共催

玄洋社記念館は、日本大学通信教育部が十一月二十五日、福岡市で開催する公開シンポジウム「アジアは燃えていたか―アジア主義と福岡玄洋社―」を共催します。

地元福岡に生まれ、アジア近代史に大きな足跡を残したアジア主義の担い手としての玄洋社について考察しようという、一般市民を対象にしたシンポジウムです。参加無料。大勢の皆さんの来場をお待ちします。

また、翌日の二十六日にはシンポジウムに関連して「福岡玄洋社関係史跡の見学」が予定されています。

シンポジウムでは▽日本大学通信教育部長・日本大学教授、高綱博文氏が「問題提起」▽千葉商科大学教授、趙軍氏と▽福岡地方史研究会会長、石瀧豊美氏が「基調報告」をし、その後「アジア主義と福岡玄洋社」のテーマでパネルディスカッションが行われます。

「福岡玄洋社関係史跡見学」では玄洋社記念館、玄洋社跡、玄洋社墓地などがコースに組み入れられています。

【実施要領は次のとおりです】

■シンポジウム

▽**日時**＝11月25日午後2時～5時

▽**会場**＝福岡県水産会館（福岡市中央区舞鶴2丁目4番19号＝玄洋社記念館の二軒隣）

■福岡玄洋社関係史跡見学

▽**日時**＝11月26日午前10時～午後3時

◇

主催＝日本大学通信教育部

共催＝社団法人玄洋社記念館

後援＝福岡県漁業協同組合連合会、西日本新聞社、他

※詳細は玄洋社記念館（電話092・771・3203）へお問い合わせください。

高綱　博文氏

趙　軍氏

石瀧　豊美氏

建設コンサルタンツ
建設事業の計画・調査・測量・設計・施工管理
ジーアンドエス・エンジニアリング株式会社
代表取締役　花田　勲
代表取締役　長尾　三郎
本　社　福岡市博多区東比恵三丁目二四―九
〒八一二・〇〇七電話（092）481―3100
東京支社　東京都杉並区高円寺南一―二三―一
〒一六六・〇〇三電話（03）5378―5800
営業所　千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のコア企業!!　21世紀の水産業界を領導するアキラグループ
◇鮮魚仲卸業◇
株式会社　アキラ水産
AKIRA
Ok. Fresh! Sea foods.
代表取締役社長　安部　泰宏
本　社　福岡市中央区長浜3丁目11―3―711
電話092―711―6601（代表）
関連会社／株式会社コウトク水産

地下施工のトータルプロデューサー
M・S・P（地中連続壁）、ヤ土工工事、解体工事、地下工事一式（計画及施工）
中村工業株式会社
代表取締役社長　中村　隆輔
本　社　福岡市中央区舞鶴3丁目2の6
TEL　092（751）9381
FAX　092（714）0905
出張所　熊本、長崎、鹿児島

造園・緑化　自然とコミュニケーション
株式会社　別府梢風園
代表取締役社長　別府　壽信
本　社　〒813-0025 福岡市東区青葉一丁目六―五三
TEL〇九二―六九一―〇六七八(代)
FAX〇九二―六九一―四五五四
E-mail：info@shoufuen.co.jp
BEPPU

(財)日本医療機能評価機構認定
HARADOI HOSPITAL
特定医療法人
原土井病院
理事長　原　寛
―開放型病院・臨床研修指定病院―
〒813-8588
福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881(代)
http://www.haradoi-hospital.com/

再録

来島恒喜小伝

風蕭々

柳猛直

◀10▶

潰え去った改正案

黒田内閣は窮地に陥った。大隈外相の負傷後は二十一日の閣議でも黒田を助けて条約改正を進めようという閣僚は一人もなく、遂に黒田内閣は閣内不統一を理由に十月二十四日、総辞職をする。（大隈は負傷病臥中であったので十二月十四日に辞任した）

内大臣・三条実美の臨時総理を経て十二月十四日、山県有朋が組閣の大命を拝し、外務大臣には長州出身の青木周蔵が就任する。

大隈の改正案は、ここに完全に潰え去った。その後、青木、榎本武揚がこれを手がけたがうまくゆかず、来島の一撃から五年後の日清戦争直前、陸奥宗光外相によって法権の完全回復をふくむ条約の改正が成立する。

もし大隈の改正案が実現していたならば、大隈は歴史に悪名を残さねばならなかったであろう。その意味で「大隈は来島によって政治生命を救われたのだ」という頭山の評言は当たっていた。

福岡における来島恒喜の葬儀は明治二十二年十一月十一日に行われた。

遺骨は午後二時、喪主・来島新三郎の薬研町の家を出た。先頭に「来島恒喜柩（ひつぎ）」と大書した旗を立て、八人の白丁（はくちょう＝柩のかつぎ手）にかつがれた柩の前後には高張提灯を立て、そのあとに頭山夫人、箱田未亡人、進藤夫人の人力車が続く。少し遅れて頭山、進藤、平岡、香月等をはじめ知己友人千余名の列が続いた。

葬列は薬研町から薬院門に入り万町、下名島町、橋口町を経て西中島橋を渡り中島町から川を渡って掛筋を真っすぐに石堂橋に出て十里松原の崇福寺に着いた。沿道には葬列を送る人垣が出来て、ところによっては群衆を押し分けて通るというありさまであった。

頭山は弔辞を述べて

「天下の諤々（がくがく）は君が一撃に若かず」

と言った。

このころ誰が作ったのか、こんな甚句が博多から九州一円にしきりに歌われた。

いかい（たくさん）書生のある中で　私の好きなは来島さん　三千九百万人の頭にかかる難儀をば　ただ身一つに引き受けて　ぽんと投げたる爆裂弾　すぐさま自殺のいさぎよさ　人間一度は死ぬものよ　どうせ死ぬなら国のため

来島の行動は、当時のあらゆる階層に、大きな感動を与えたのである。

大隈重信も、来島が爆裂弾を投じた直後に自刃したことに触れて

「大久保を倒した島田一良の如きは非凡の豪傑であったそうだが現場で腹をかき切らないで縲絏（るいせつ）の恥辱（縄目の恥）を受け刑場の露と消えたのは真の武士道に背駆した見苦しい最期である。殊に来島という奴は目先の見えた怜悧な奴であった。我輩をやっつけるには外務省の門外の狭いところを選んだ如き、馬鹿では到底こんな考えは出ない。かく狭い道を通る時には勢い馬車を徐行させねばならぬ。この徐行の場所に目をつけた彼は、なかなか偉い。我輩は彼のために片脚を奪われたが、しかし彼は実に心持ちのいい面白い奴と思っている」

と語っている。

頭山も

「来島は元来、大隈に対して何らの恩怨もない。彼はただ条約改正に反対して、これをやめさせようとしたのみである。条約改正が遂に中止になった時は、すなわち彼の目的を達した時である。大隈もまた片脚ぐらいで、その命が助かったのは彼のためにも賀すべきことではないか」

と言った。まさに、その通りであろう。

大隈は来島の命日には墓前に香華料を供え続けた。大正十年、谷中の全生庵で来島の三十三回忌が行われた時、大隈は病床にあったが百円の香華料を送ってきたので一同感激し、頭山の代理として月成勲、葛生玄晫が病気見舞い旁々、大隈邸を訪問して厚意に深く感謝の意を表した。

大隈は、その翌年の大正十一年、八十五歳で亡くなった。

来島の一撃は玄洋社の名を天下に轟かした。条約改正に反対していた全国の志士たちの間では、大隈が頑として主張を変えないと聞いて「こうなれば大隈を倒すほかない」という機運が盛り上がり、そういう連中が続々上京して機会をうかがっていた。

しかし閣議の結果は、条約改正は中止の方向に向かっているという情報が流れて各党各派の幹部たちは、はやる青年たちをおさえて「しばらく様子を見よ」と指示していた。その矢先に来島の一撃である。志士たちは先を越されたと、悔しがった。

なお余談だが、外務省の盆栽台を応急の手術台にして切断された大隈の隻脚は北畠治房男爵が油紙に包んで室外に持ち去ったが、記念の足であるというので遺棄するに忍びずアルコールに漬けて保存されることになった。

ところが、このアルコールを絶えず取り替えなければならない。大隈は下戸で、アルコールはたしなまなかったが、この足がたいへんな大酒飲みでアルコールの消費量がすごい。大隈家では、アルコール代がかさむのに閉口して、赤十字病院に引き取ってもらって足には官費で飲んでもらうことになった。

来島恒喜の名とともに玄洋社の存在は、一躍世の注目を浴びることになるのだが、地元でも一段と畏敬の眼を以て見られるようになった。

花柳界でも

いかい書生のある中で

私の好きなは来島さん

が、しきりに歌われ、玄洋社の壮士たちは、いよいよ国士の気概をもって国の内外に雄飛することになる。もちろん、来島の精神は脈々と受け継がれていた。

風蕭々兮易水寒　壮士一去兮不復還

そして駱賓王の「易水送別」は

昔時人已没　今日水猶寒

人はすでに去ってしまったが、易水の水は今も寒し、と言っている。

（おわり）

福岡市博多区千代の崇福寺・玄洋社墓地にある来島恒喜の墓。裏には「明治廿二年十月十八日於東京霞関自刃行年三十一」と記されている

福岡だより

博多祇園山笠

飾り山に古島一雄が登場

県知事の祭り中止通告 知略ではね返す

玄洋社ゆかりの新聞人

七百六十年余の伝統を誇る福岡市の「博多祇園山笠」の飾り山笠に、今年は玄洋社にゆかりの深い新聞人、古島一雄の人形が登場した。博多っ子の要請を受けて県知事の山笠中止通告を知略ではね返し、山笠を消滅の危機から救った人。窮状を訴える博多っ子に古島を紹介したのは玄洋社だった。

博多っ子の血を沸かす博多祇園山笠は毎年七月一日から十五日まで繰り広げられる。期間中、福博の町々に、博多人形師が精魂込めて作り上げた飾り山笠が立って見物客の観覧に供される。十日からは勇壮な舁き山笠が町内を舁き回り、十五日払暁の「櫛田入り」で博多っ子のエネルギーは一気に爆発。祭りはフィナーレを迎える。

今年、飾り山笠は十四本立った。古島の人形が登場したのは、福岡随一の繁華街、中央区天神一丁目に立った山笠。「言論百三十年九州に立つ」の標題で、地元ブロック紙「西日本新聞」の歴史が、時代を彩った人物の人形を掲げて語られていた。

古島の人形は、山笠のほぼ中央の位置を占めていた。演説をぶつように右手を掲げた剛毅な姿をしていた。説明書きは「百三十年の歴史には、明治三十年代、博多山笠中止というピンチをキャンペーンで救った古島一雄……がいる」と記されていた。

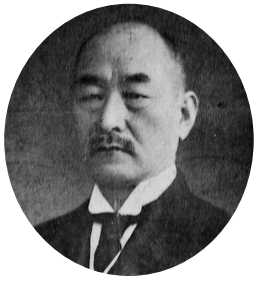
詳しく述べよう。

明治三十一年、着任早々の福岡県知事、曽我部道夫は山笠を中止するよう福岡市当局に通告した。半裸の男が町を練り回る祭りは見苦しい、冷や酒をがぶ飲みして見苦しい、などを理由にあげたが、最大の理由は、前年の祭りで山笠が、開通したばかりの電線を切断したためのようだった。

困った博多の人々は「何とかならないものか」と玄洋社に駆け込んだ。当時の玄洋社社長は進藤喜平太翁。喜平太翁は玄洋社の機関紙「九州日報」の編集局長だった古島を紹介した。

古島は陰の軍師を引き受け中止反対運動の戦術を伝授した。県、市に整然と中止反対の陳情を行い、夜は櫛田神社に集合して静粛に飲酒。中止反対が博多の人々の世論になったころ、九州日報は論説で中止反対を論じた。その結果、山笠を電線に触れない高さにするなどの条件付きで継続された。

古島は当時三十四歳。福陵新報が、九州日報に改名したのを機に、紙面刷新のため東京の「日本新聞」から一年の約束で招かれていた。後に衆議院議員に六回当選。戦後は吉田茂首相の相談役を務めた。昭和二十七年五月死去。八十七歳だった。



古島 一雄

古島一雄が登場した飾り山笠＝点線内が古島の人形

平野国臣先生「生誕祭」

志を偲び50人が参列

平野神社で行われた国臣の生誕祭

勤王の志士・平野国臣の「生誕祭」が三月二十五日、福岡市中央区今川一丁目の平野神社で行われた。ご遺族はじめ崇敬者ら約五十人が参列。山内勝二郎宮司を祭主に神事が行われた。

桜雅流吟詠会による「平野国臣を憶う」などの吟詠で国臣の崇高な志を偲んだ。

国臣は文政十一年（一八二八）三月二十九日、福岡市中央区地行の生まれ。尊皇攘夷を唱え三十歳で筑前（黒田）藩を脱藩、京都で活動した。挙兵するが捕らえられ、元治元年（一八六四）、京都六角の獄舎で処刑された。

玄洋社関係史料の紹介

宇田川文海『西南拾遺』（八）

石瀧　豊美

第38回

（早稲田大学図書館所蔵）

明治十二年七月刊行
小室信介閲
宇田川文海編輯
『西南拾遺』巻之二

松江、義に依て喜五郎に伴はる。（続き）

扨新士には、是より小梅の方へも余り通はず、次第に身持も堅固になりゆき、今は彼れも元の新士になりけるよ、と世間の人も云ひはやす程なりしが、其年も暮れて翌る明治五年にもなりければ、新士も心淋しきまゝ、折節は小梅の方にも通ひ、或は同藩の若殿原にて少し志ある人とも見れば深くも交りを結びて、数々我家に招じ来りて酒宴に興を尽すなどしつ、心ありげに日をば送りぬ。

これより後、新士いかなる事をしいだすや。又松江の身のなりゆきはいかにぞや。是は巻を改めて詳かに解きわけなん。

明治十二年九月刊行
『西南拾遺』巻之三

新士色に溺れて石束に懲めさる。松江書を留めて新士を感ぜしむ。

君が為に衣裳を薫ずれば、君蘭麝を聞きながら馨香ならずと思へり。君が為に容飾を事とすれども、君金翠を見ながら顔色なしとおもへり、と唐土の白居易が詠ぜしごとく、新士の妻松江には心ばへさへ姿さへ優にやさしきのみならず、つれなき夫を恨みもなさで、貞女の操のあらはれて、又たぐゝなくありたれど、小梅の色香に迷ひたる新士の心より見ときは蘭麝の馨も香しからず、紅粉の粧も美しからず。

況いて貧苦につかる、、やつやつしげなる形容を見るにつけても面白からねば、喜五郎と示し合しつ、苦界に沈んとなしたりき。然に途中の異変ありて、松江は駕籠に打のせられ、夢路をたどる心地しつ、あきれまどひて居たりしが、十町余りも行きたらんとおもふ頃、駕籠をおろして戸を引明け、松江の手を取り引出すにぞ。此は浅猿山賊の巣窟へも連れ来られし者なるかと胸とどろかしつ、四傍を見れば、思ふにたがひし武家屋敷にて、其が奥座敷の中央に駕籠おろされし容子なれば、再びあきれて声さへ出ず。

少時俯伏居たりしが、やゝありて胸おし鎮めて面をふりあげ彼方を見れば、いと厳しう見えたる武士の年五十ばかりならんと見ゆるが、ムヅと座りて居たりける。

松江は事の心を知らねば、只あきれにあきる、のみ。其体を見て彼方の武士打頬笑みて松江に向ひ、松江ぬし。さな驚ろきぞ。由縁を知らねば不審は無理ならねど、汝の為にあしかれとはさらさらなせしことならず。心を鎮めて訳聞き玉へ。我は当家中にて足軽の組頭石束平右衛門といふ者なり。

汝が夫、森新士も我組下の一人にて彼の親辰兵衛の臨終の際、我に託して云へらくは、年来貴所の支配を受け、上への忠義もおろそかならず、かく生涯を無事に終ふるは、全く貴所の御蔭にて謝するも猶余あり。就きて願ふは他の義にあらず。豚児新士には知らせ玉ふ如く、人並々に成長して、今やこの辰兵衛にかはりて主君の用に立つべき時となり候ひぬ。

彼も文武二途の業は心得させてありぬれば、最早心残りも無き筈なれど、惜しいかな。天性酒食に溺る、癖あり。我世にある時すら目にあまる所行いと多かり。されば我死なば如何なる醜き所行なさんもはかりがたし。これのみ臨終の障りに候ひぬ。あはれ貴所、彼をば向後子とも見そなはし、教訓偏に願ひ奉ると切に頼める遺言に、我も哀れとおもひしかば、容易く是を肯ひしに、辰兵衛の喜びいふばかりなく、快げに打笑みつ、我に向ふて合掌しつ、其儘息は絶えたりき。

其後我は廃藩の挙あるを聞き、早く帰商の実効を顕し組下の模範とならん為、大坂道修町二丁目にて小西太兵衛といふ由縁を頼み、商法の熟議なさんと一昨年より浪華に上り、種々商議を尽せし末、我国産を彼地に送り、其手数もて利を得んと一決なして、過る日に帰国をなして噂を聞くに、森新士の不行跡言語に絶えし有様にて、貞操正しき妻松江を苦界に沈めんと謀るよし。

扨こそ思ひ当りたれ、子を見ることは親に然かず。辰兵衛の遺託は爰処なんめりとおもひしまゝ、組下の者にて無二の輩を四、五人かたらひ、かくこそ謀りて助しなれ。この上はかならず心をな屈し玉ひぞ。石束かくてあらん間は、身に引受けて処置し候はん。気を長くしつ時をば待れよと一伍一什を委しく語げて、いと慇懃に心付くるにぞ。

松江は始終涙にくれ、深く石束の実意を感じ、夫の事ども心にかゝれど、かく頼母しげなる詞をかへし、とにかく云はんは、いかがなりと、只よき様にとのみいらへて、石束が為ん様にぞ従ひける。

新士は斯くとも知らず、松江が何処へかゆきし上は、心にかゝれるものなしと、小梅の方へも行きかよひ、或は我家へ同志をつどへて酒飲みあかして日を送り、半年あまり過ぎたりしが、一夜例のごとく小梅の許へかよひゆきて終夜濃かにちぎりつゝ、暁にきぬぎぬのわかれかこちて袖の移香に名残りを留めつ。

しの、めのほがらほがらとあけゆく頃、城下外れの寄合町の辺まで帰り来しに、彼方より雲突くばかりの大の男、手拭もて面を包みしが、大地どうどうと踏ならして新士の前に歩みより、大手をひろげて組み付きつゝ、これはとおどろく新士を片足すくふて地上に捻ぢふせ、しかと脊に乗据えけり。

新士は起きんと身をあがけど、上なる男は大力のしたゝか者にて、力をこめて押へたれば、容易に刎返さんこと思ひもよらず。如何はせんと困じ果て、ナア遺憾や、と呼ばはれば、かの男は呵々と笑ひてやをら傍に飛退きて、面を包みし手拭ひをばかなぐり捨つ、突立たり。是れなん、新士が組頭なる石束平右衛門てふ武士にぞありける。

新士をめぐる物語は福岡城下を舞台に展開される
＝写真は福岡城跡の潮見櫓と城壁